

安平町の『いろひろい』から一年。藤尾さんにオンライン取材を試みた。

北海道が好き。クレヨンで絵を描くことが好き。そして『いろひろい』へ。

きっかけは2020年になってまだ間もない頃の話。新型コロナウイルス感染症が始め、閉塞感に近い感情を抱いていたという。そんな時、ソロキャンプ動画に出会った。一人で自然やキャンプ飯を楽しみ、発信するスタイルに「自分が好きなことを



藤尾さんへの取材中に撮影。
ここには書ききれない程の思い出話をしてくれた。

一人で発信できるのではないかと、感じたそう。元々、クレヨンで絵を描くことが好きだった藤尾さん。そして大好きな北海道。いろんな町の絶景や生産者の思いが伝わる場所をキャンプを通して全身で感じ、クレヨン画で伝えたいと思った。これが、いろひろいとして北海道を描く旅のスタートとなった。

この活動は、藤尾仁志という名ではなく、『いろひろい』という名で行われている。こういった意味合いで『いろひろい』という名前にしたのか気になり聞いてみると、「北海道に散らばる魅力の色に例え、拾い上げていく（映像として伝えていく）という意味で付けたんです」と教えてくれた。

「安平町での取材を思い出すと頑張ろうっていう気持ちが出てくる」

安平町での『いろひろい』は、2021年5月中旬から始まった。



藤尾さんは「皆さん、丁寧な対応をしてくれて嬉しかった」と取材時に何度も話していた。

ちょうどこの頃、新型コロナウイルス感染症の拡大でレビロケなどが減り、在宅待機が増えたという。そんなタイミングだったこともあり、事前取材や取材にかける時間を長く確保することができた。結果、コミュニケーションを密に取ることができ、より思い入れが強くなったそう。

さらに、一人で動画を作っている、自分のしていることが正しいか悩むことがあるという。より多くの時間をとれたことで、生産者や町と寄り添うことができ、一緒に答えを出せた感覚になった。そういった意味で、「いろひろ

いとして大切なことを教えてくれた場所です」と話してくれた。

生産者の魅力こそ、北海道の魅力であると。

自分の好きなものを映像を通して伝えていくことから始まったいろひろい。

町の魅力が伝わるコンテンツを生み出していると信じ制作していたが、ちゃんと届いているのか不安感を抱くこともあったそう。そんな時に声をかけてくれたのが安平町だった。本当に嬉しかった」と話してくれた。

さらに、この町には忘れられない思い出があるという。菜の花畑でソロキャン、安平町を食べ尽くす、では、4人の生産者が出演した。完成した動画を見たそのうちの一人から「自分がやって来たことは、間違いではなかったと思えた。ありがとうございませう」という言葉が届いたと嬉しそうに話してくれた。印象に残ったのは嬉しいだけでは

なくて、「映像を通して生産者の悩みや不安を解決できたのではないだろうか？」とも感じることもできたという。想像もしていなかったこの経験は、『いろひろい』を続けていく上でとても大切にしているそう。

ただの好きを伝えることから、誰かの活動の応援にもなっていることを体感してからは、「作り手の魅力こそ、北海道の魅力なんだと。そういう魅力が伝わるような映像作りをこれからもしていきたいと思えた。そう思えたのが安平町でのいろひろいでした」と取材の最後に笑みをこぼしながら話してくれた藤尾さんでした。

次のページでは、藤尾さんの取材を受けた方に、取材を受けてみての当時の感想などについて聞いてみた。